1 月第 3 週の礼拝説教

■日　時：2024 年 1 月 21 日（日）10：30～11：30　降誕節第 4 主日礼拝
■説　教：　保科けい子牧師
■聖　書：新約：ヨハネの手紙一 1 章 1～4 節（新約 p441）
■説教題：「　喜びが満ちあふれるように　」
■讃美歌：8「心の底より　神に感謝せん、　」
　　288「　めぐみにかがやき　愛にかおる　」

今年は、新年の最初の主の日に、エフェソの信徒への手紙 2 章 1 節から 10 節までの御言葉が日本基督教団の聖書日課から示され、その段落に「死から命へ」という見出しがついていることに出会い、その素晴らしい命への転換は、「自らの力によるのではなく、神の賜物です。」と語りかける御言葉に出会いました。2024 年の歩みをそのような観点から進めていきたいと思わせられる出会いでした。そして、その「神の賜物」を言い換えるとすれば、1 月 14 日の聖書箇所として示されていたガラテヤの信徒への手紙 1 章 12 節では「イエス・キリストの啓示によって知らされた」ものと語られているのではないかと、お話ししたと思います。そして、その流れの中で、私たちもまた、ガラテヤの信徒への手紙 1 章 15 節で著者である使徒パウロが到達した「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神」に出会うことができるのではないでしょうか。そして、私たち自身が「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神」を本当に信じることができるなら、私たちには新しい歩みへの道が開かれている、ということをお話ししました。

そして、その新しい道へと歩み出そうとする私たちに対して、本日与えられたのがヨハネの手紙一 1 章 1～4 節だと私は受け止めました。この 1 節から 4 節は、この手紙全体が何のために書かれているのか、また何を書いてあるか、ということを初めに明らかにしているところです。何のために書かれているのかというと、それは 1 節の最後に「命の言について」とあり、またこの段落の見出しにもありますように、この手紙の著者ヨハネは「命の言」について伝えたかったです。その命の言とは何かについて、ダッシュで囲まれている 2 節で「――この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。――」と述べています。1 節と 2 節で、「言」と「永遠の命」、その二つのキーワードが示されていると考えたときに、私はヨハネによる福音書の御言葉のいくつかを思い出していました。特に、ヨハネによる福音書の書き出し 1 章 1 節の「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」という御言葉が思い浮かんできました。そうしますと、このヨハネの手紙一も書き出しは「初めからあったもの」とあるので、非常に

似ていることが分かります。元の言葉を見ますと、それは単なるものではなく人間であることが分かります。そこから、ヨハネによる福音書の 1 章 14 節の「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。」という御言葉につながってまいります。

私たちは、時として、本当に初歩的な問いに悩まされることがあります。それは、私は神様を信じている、イエス・キリストを信じている、だから毎週の礼拝にも出席している、聖書を読みお祈りもしている、けれども、本当に神様の言葉を聞くことができているだろうか、見ることができているだろうか、手で触れているという実感を持つことができているだろうか、という問いです。そのように思い悩んでいる私たちに対して、その神様の御言葉が肉体をとって私たちの目の前に現れたのだ、ということを告げているのが、ヨハネによる福音書の 1 章 14 節の「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」という御言葉であると、私は確信しています。肉体を取るということは人となるということですから、本日の聖書箇所ヨハネの手紙一 1 章 1 節に「わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたもの」とあるように、その語る言葉を聞くことができ、その行いを目で見ることができ、さらによく見ることができ、手で触れることができるお方であるということになります。では、人となられた神様の御言葉とは一体誰かというとそれは主イエス・キリストである、というのがヨハネによる福音書が語っている使信の中心であり、「わたしたちはその栄光を見た」と語っている福音です。

そのヨハネによる福音書を形づくっている言い伝え（伝承）を聞いてそれを次の世代へと伝え続けた人々がいましたから、ヨハネによる福音書ができてきたのです。ですから、ヨハネの手紙一の著者は、その福音書を見聞きしながら、さらに自分たちが伝え聞いた事柄や現実に見聞きしていることなどとつなぎ合わせながら、「わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。」と、さらに次の世代へと宣べ伝えようしているのです。2000 年という時の流れの中で、キリスト教会が続けてきたのはそのような営みだったのです。その目的が記されているのが 3 節です。「わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。」この手紙の著者ヨハネは、主イエス・キリストと直接出会うことができなかった後の時代の人たちにこの手紙を書いています。ヨハネ自身も、生前の主イエスに出会ったことがない世代です。しかし、確かな「御父と御子イエス・キリストとの交わり」のなかで、命の言を伝え聞き、それをよく見て、手で触れるようにして受け止めたからこそ、主イエス・キリストを見たことのない人たちに向かって、ヨハネ自身の言葉をもって、命の言を伝えようとしているのです。私たち

が神様の言葉を聞き、神様の御言葉にお応えをするという交わりを与えられていると同じように、あなたがたもそうなる、そのために私はこの手紙を書いている、という確信をもって、ヨハネは手紙を書いています。ここから見えてくるのは、「十字架におかかりになったイエスが復活なさった話を聞いた」、「自分にもそのイエスが現れて声をかけてくださった」、「イエスの後ろ姿を見た」、「神様にさわった」、などと自慢げに不思議な体験を誇っているのではなく、「ヨハネの教会」と呼ばれるような教会の中で、父なる神様と御子・キリストとの深い交わりを与えられているという著者ヨハネ自身の経験です。もちろん、そこには聖霊が働いておられ、一人ヨハネだけの経験ではなく、共に集っている人々、皆が与っている恵みだったのです。だからこそ、4 節で「わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。」と力強く語っているのだと思います。ここに、キリスト教が交わりの宗教と言われる理由が示されているように思います。ですから、教会は歴史を通じて、使徒信条にありますように「我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。」と告白し、信徒相互の交わりを大事にしてきました。また自分の教会の中だけでなく、労苦している全世界の教会や信徒との交わりも大切にし祈りあうことを務めてきました。「満ちあふれる」という言葉の元のギリシャ語には、「完成する、満たされる、本当になる」という意味もあるそうです。私たちの歩みは、必ずそのような目的に向かって導かれていることを信じてまいりましょう。